

モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究 その2

—遊牧民と集合住宅居住者の比較からみた生活環境に関する生活・コミュニティ意識の傾向的特性について—

日大生産工

○川岸梅和

日大生産工

広田直行

モンゴル科学技術大 I. Gonchigbat

日大生産工

北野幸樹

日大生産工（院）杉本弘文

1. はじめに

1992年、68年間続いた一党独裁の社会主義国家体制から民主主義国家体制に移行した〔シネチレル（刷新）：1990年、ソ連のペレストロイカの影響を受けて民主化したモンゴルでの呼称〕ことにより、生産・生活環境が悪化した地方からの首都圏への移動、製造業・加工業の衰退、失業者の急増、一部の富裕層と多くの貧困層の所得格差の拡大、草地の劣化、生態環境破壊的な鉱物資源採掘等、市場経済のマイナス面の現象が著しい^{注1)}。加えて、近年ゾド（雪害）やガン（干害）^{注2)}などの自然災害の影響により首都ウランバートルの人口増加は特に顕著である^{注3)}。その受け皿は第二次世界大戦以降ソ連の主導により計画・建設された都心部の「集合住宅地区」と都市周縁部に無秩序に拡大する「定住ゲル地区」である^{注4)}。特に未計画な「定住ゲル地区」を良好な住宅地区として整備を進めていくことが課題として考えられていると同時にモンゴルが伝統的に有する固有の特性^{注5)}を如何にして保持し、都市社会に展開していくことができるかを導き出すことが重要と考えられる。

筆者らは、遊牧民の環境負荷の極めて少ない生活環境づくりに着目し、ウランバートル近郊に暮らす遊牧民に対するアンケート調査を実施し、遊牧民の生活意識・活動の傾向的特性を整理し、伝統的な遊牧社会の中で育まれてきた環境負荷の少ない生活体

系と生活・コミュニティ意識の関係性について調査・研究を展開してきた。

本稿においては、遊牧民及び集合住宅居住者に対する生活意識・活動実態等に関するアンケート調査及びヒアリング調査を行い、それらの実証的データを基盤として遊牧民及び都市生活者（集合住宅居住者）の生活環境、生活・コミュニティ活動等に関する意識特性を把握し、その比較・分析より伝統的な遊牧社会の中で育まれてきた環境負荷の少ない生活体系と生活・コミュニティ意識の関係性に関する基礎的知見を得ることを目的としている。

2. 研究の方法

本研究ではまず、ウランバートル近郊に暮らす遊牧民を対象として、2006年8月に遊牧民の生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査及びヒアリング調査を行った。遊牧民を対象としたアンケート調査は、調査対象とした遊牧民世帯を直接訪問し、調査の主旨を説明した上でアンケートを配布（57部）すると共に、回収についても配布と同様に各世帯を直接訪問し回収（57部）した。尚、アンケート調査は各世帯を対象に1部ずつ配布し、世帯主より回答を得た。調査を行った地点は図2に示す通り、調査地AとBであり、各々ウランバートルから約50km及び80km圏域に位置している。

次に、集合住宅居住者を対象として2007年9月に生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査を行った。居住者アンケートは世帯主を

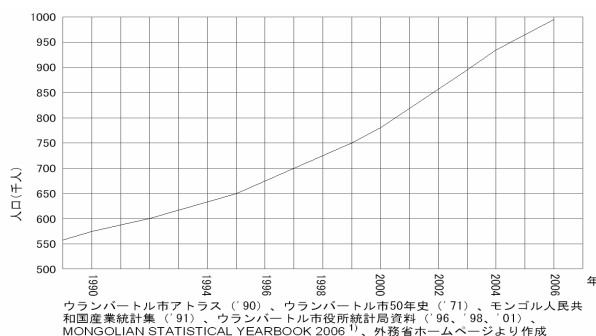


図1 ウランバートルの人口推移

表1 アンケート調査の概要

遊牧民に対するアンケート調査			
	調査地A	調査地B	合計
配布数	28	29	57
回収数	28	29	57
回収率	100%	100%	100%
集合住宅居住者に対するアンケート調査			
配布数	120		
回収数	98		
回収率	81.7%		

Study on Living Environment of Mongolian Nomad who Lives in the Suburbs of Ulaanbaatar, Mongolia PART2
— CHARACTERISTIC TENDENCIES IN LIVELIHOOD AND COMMUNITY PERCEPTION REGARDING THE LIVING ENVIRONMENT AS VIEWED BASED ON COMPARATIVE STUDY BETWEEN NOMADS AND APARTMENT SETTLERS —

Umekazu KAWAGISHI, Naoyuki HIROTA, Ishjams GONCHIGBAT, Koki KITANO, Hirofumi SUGIMOTO



図2 遊牧民アンケート調査・調査地

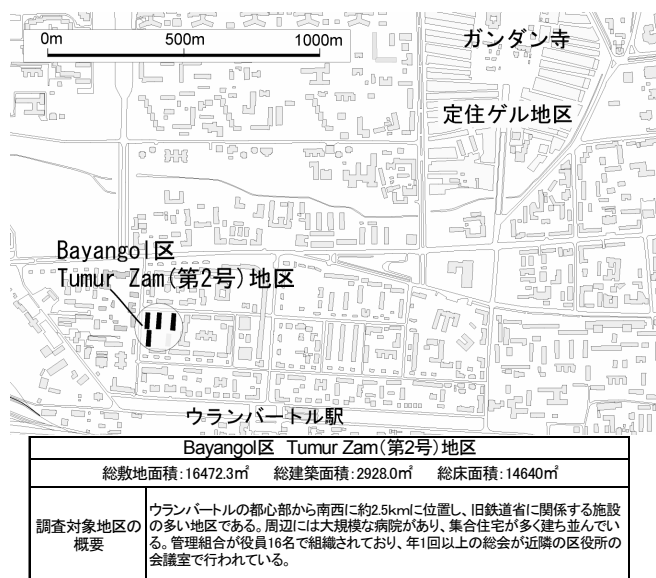


図3 調査対象集合住宅〔BAYANGOL 区 TUMUR ZAM (第2号) 地区〕

対象に120部配布し、97世帯より回答を得た。配布及び回収は直接訪問により行った。調査対象とした集合住宅はBAYANGOL 区 TUMUR ZAM (第2号) 地区であり、1979年に竣工された平行型配置形態、住戸形式は階段室型でレンガ造5階建て(総住戸数240戸)である。設計及び施工共にソビエト連邦の国营会社である。尚、詳細については図3に示す通りである。

3. 調査結果

3.1 調査対象者の属性

3.1.1 家族構成及び年齢構成(図4・図5)

家族構成に関して、平均家族人数では遊牧民が5.4

人、集合住宅居住者が4.1人である^{注6)}。遊牧民世帯においては5人以上の割合が59.6%を占め、集合住宅居住者世帯においては29.5%であり、遊牧民世帯の方が大家族で構成されている傾向がみられる。これは、遊牧生活において放牧・搾乳等の多くの日常的な作業を家族で分担し協力して行っていること等が反映しているためと考えられる。

年齢構成に関して、平均年齢では、遊牧民が48.1歳、集合住宅居住者では40.3歳となっており、約8歳の差がみられる。特に50歳以上の割合に差異がみられ、集合住宅居住者に比べ遊牧民の年齢層が高い傾向がみられる。尚、2006年現在、モンゴルは30歳未満の人口が総人口の59.1%を占めると共に、モンゴル人の男女全体の平均寿命は66.3歳^{注7)}となっている。このことから遊牧民の年齢層の高さが裏付けられたと言えよう。

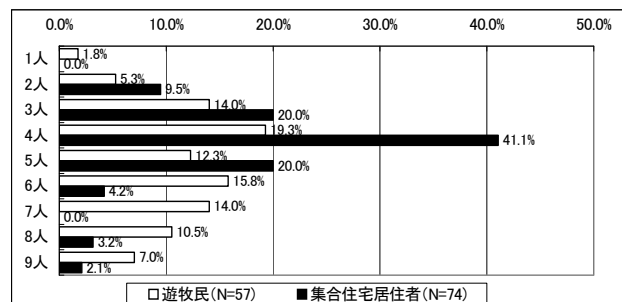


図4 家族構成

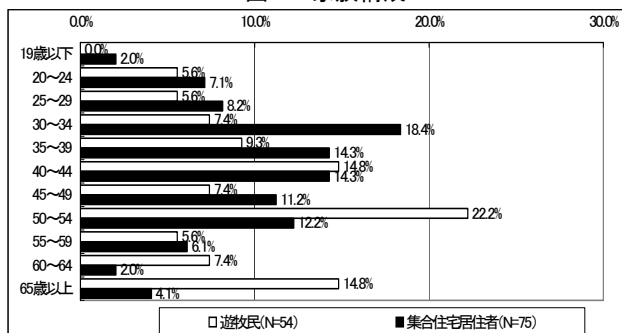


図5 年齢構成

3.2 近隣の世帯との協同(働)について

3.2.1 近隣の世帯との付き合い(図6)

近隣の世帯との付き合いの状況に関しては、遊牧民において「④ほとんど近隣の世帯を知らない」の割合は0%であり、「①親しくお付き合いをしている」「②生活していく上で協力し合っている世帯がある」が約82%を占めている。集合住宅居住者においては「③顔見知り程度の世帯はある」が33.0%で最も割合が高く、次いで「④ほとんど近隣の世帯を知らない」が29.5%となっている。このことから、集合住宅居住者に比べ遊牧民のほうが近隣世帯と密接な関係性を持っていると言えよう。

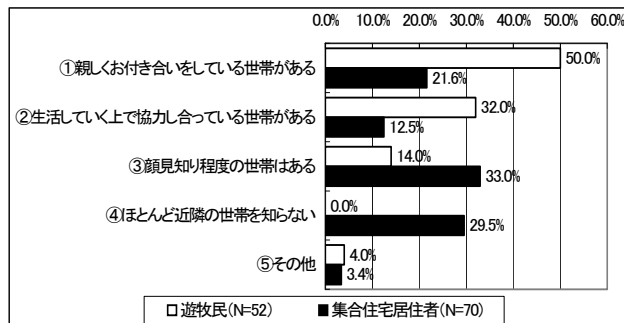


図6 近隣の世帯との付き合いの状況

3. 2. 2 協同（働）活動の内容

近隣の世帯同士での協同（働）活動の内容に関しては、遊牧民では家畜の世話（生殖・飼養、哺乳・搾乳管理）、草原の手入れ（草原地の管理、家畜の飼料となる草刈等）、フェルト作り、井戸の管理等、広範囲に及ぶ。また、より親しく付き合いをしている世帯では家事（病気の時の助け合い、子育ての協同等）や宿営地の移動の協力も行っている。加えて、日常生活の中での余暇活動（「テレビを見る」「酒を飲む」「子どもの遊び」等）においても近隣の世帯同士で互いのゲルを行き来しながら、密接な関わり合いを有している。一方、集合住宅居住者では、清掃、共用設備（階段室の照明、街灯等）の手入れ、集会・会議が挙げられた。しかしながら、「参加したことがない」「どんな活動をしているか知らない」といった意見も多く、居住者間の協同（働）活動は管理組合の役員を中心とした一部の居住者で行われている傾向がみられる。

3. 3 現在の生活に対する継続意向及び継続理由

3. 3. 1 現在の生活に対する継続意向（図7）

継続意向に関しては、継続意向のある居住者^{注8)}は遊牧民の89.1%、集合住宅居住者の59.4%となっており、遊牧民・集合住宅居住者共に継続意向のある居住者が多くなっている。また、この傾向は遊牧民の方が強くみられる。

3. 3. 2 現在の生活に対する継続理由（図8）

継続意向のある居住者の継続理由に関しては、遊牧民では「⑦経済的理由から」が27.0%で最も割合が高く、次いで「②親族が近くに住んでいるから」「④現在の生活スタイルが気に入っているから」となっている。集合住宅居住者においては、「⑧その他」が45.3%で最も割合が高く、次いで「⑤周辺環境が良いから」となっている。集合住宅居住者の「⑧その他」では、現在の生活に対する継続理由として「立地条件が良いから」「現在の住居が気に入っているから」が多く挙げられた。

遊牧民と集合住宅居住者を比較すると「④現在の

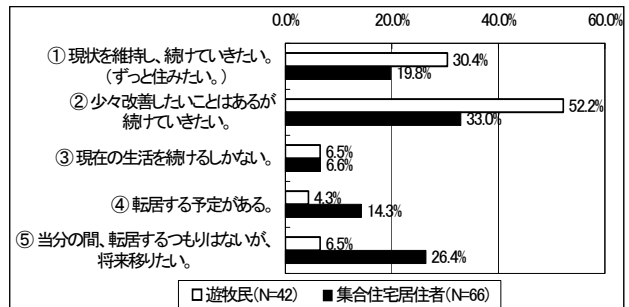


図7 現在の生活に対する継続意向

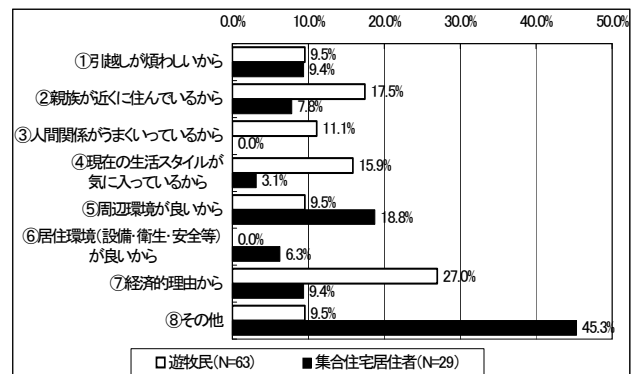


図8 現在の生活に対する継続理由

生活スタイルが気に入っているから」において差異が大きく、遊牧と定住という生活スタイルの違いが反映していると言えよう。

3. 4 生活環境評価（図9）

生活環境に関する項目（住居の広さ、設備・機能、衛生・安全、暮らしやすさ、総合評価）に対する満足度についてアンケート調査を行った。評価方法に関しては、各項目の満足度を5段階評価法^{注9)}により得点化し、各項目毎に平均得点を算出したものを評価得点とした。

遊牧民と集合住宅居住者を比較すると、遊牧民のほうが「設備・機能」を除く全ての項目で評価得点が高くなっている。特に「広さ」「暮らしやすさ」の項目において、遊牧民の評価得点が高くなっている。遊牧民の「設備・機能」に関する評価の低さは移動性を有する生活スタイルを反映して、インフラ整備状況（水道・電気・トイレ等）の悪さが影響していると考えられる。「広さ」に関しては、遊牧民の暮らし平均的なゲルの面積^{注10)}よりも集合住宅の一戸当

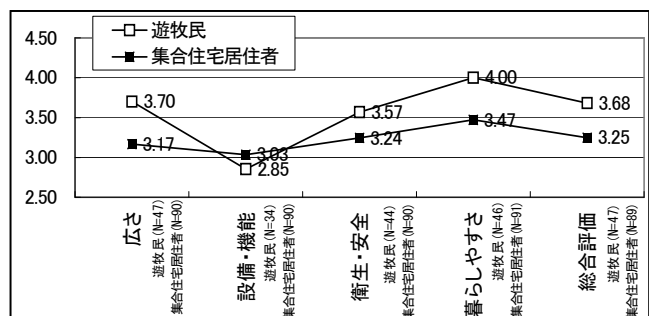


図9 生活環境評価

たりの平均延床面積（約 55.5 m²）は大きい、遊牧民は概ねゲルを寝室・居室として使うもの、キッチンとして使うものに分けて利用しており、加えて昼間は周辺の広大な牧草地上で牧畜作業を行うと共に、牧草地は休息、子どもの遊び空間としても機能しているため、「広さ」に関する項目の評価が高くなったと考えられる。

3. 5 現在の生活への満足度（図 10）

「①満足している」「②まあまあ満足している」を満足層、「④やや不満を感じる」「⑤不満を感じる」を不満足層とすると、遊牧民においては、満足層が 78.7%、不満足層が 21.2%であり、集合住宅居住者においては、満足層が 56.1%、不満足層が 32.9%である。

遊牧民と集合住宅居住者を比較すると、遊牧民・集合住宅居住者共に現在の生活に満足している傾向がみられるが、遊牧民において満足度が高いことがわかる。

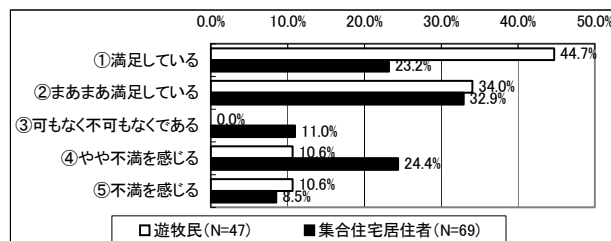


図 10 現在の生活への満足度

4. まとめ

本稿では遊牧民及び集合住宅居住者の比較から、遊牧民の生活体系と生活・コミュニティ意識の関係性に関する基礎的知見を得た。

要約すると以下のようなものである。

1) 遊牧民は近隣世帯とのコミュニティを育み、協同（働）関係を持ちながら、生業である遊牧を営んでいる。また、家畜の世話、草原や共同井戸の管理・手入れ、宿営地の移動のみならず、日常生活の中での家事（子育て等）や余暇活動においても近隣世帯とのつながりがみられる。それは協同性を基礎として多くの家畜を保有・管理し、それらから得る資源を最大限に活用するための伝統的なコミュニティであり、相互扶助により生活を豊かにし、環境負荷の少ない生活スタイルを構築している。

2) 遊牧民は現在の遊牧生活に対して高い継続意欲を有していると共に、生活環境に対する評価も「設備・機能」以外は総体的に高い。遊牧民は住居としてのゲル空間のみならず、生活空間として自然・周辺環境を活用しており、家族や近隣世帯と協同して自然・周辺環境を良好に保ち、受け継ぐことにより、生活環境を豊かに感じていると言えよう。それは、

高い生活環境への評価や満足度に反映されていると共に、遊牧固有の生活スタイルを継続していく意識の高さに表れていると言えよう。

〈注釈〉

- 注 1) 参考文献 7) p193 による。
 注 2) ゾド（雪害）とは、冬の降雪により草が雪に埋もれて放牧が困難になることで、雪がなくて温度が低いだけの凍害もゾドと呼ばれている。ガン（干害）とは、夏の降雨量が少なく、草が育たないことである。
 注 3) ウランバートル市の人口増加率は 1990 年から 2004 年の約 15 年間で約 161%に上り、現在も急激に増加している。
 注 4) 2001 年春に策定された「首都ウランバートル市 2020 年都市開発総合計画」では集合住宅地区とゲル地区の居住世帯比率は 82%と 18%が目標として掲げられている。2007 年現在では 52%と 48%である。
 注 5) 自然環境への環境負荷が極めて少ない資源循環型の生活体系。
 注 6) 2006 年の統計によると、モンゴルの平均家族人数は 4.1 人となっている。（参考文献 1）による）
 注 7) 2006 年の統計によると、モンゴル人の平均寿命は男性 62.6 歳、女性 69.4 歳である。（参考文献 1）による）
 尚、本稿の回答者の属性は遊牧民の約 95%、集合住宅居住者の約 85%が男性である。
 注 8) 「①現状を維持し、続けていきたい」「②少々改善したいことはあるが続けていきたい」「③現在の生活を続けるしかない」と答えた居住者を継続意向のある居住者、「④転居する予定がある」「⑤当分の間転居するつもりはないが、将来移りたい」と答えた居住者を継続意向のない居住者としている。
 注 9) 「満足」を 5 点とし、それぞれ「まあ満足」を 4 点、「普通」を 3 点、「多少不満」を 2 点、「不満」を 1 点として算出した。
 注 10) 2006 年 8 月に行った現地調査（実測調査）により、遊牧民が寝室・居室用に利用している平均的なゲルの大きさは約 28 m²（5 壁型ゲル）である。遊牧民は外壁の数でゲルの大きさを決めており、寝室・居室空間には 5 壁型ゲル、キッチン・倉庫等に利用する場合には 4 壁型ゲル（約 10～14 m²）を利用している事例が多くみられた。

〈本研究に関連する既発表論文（既報）〉

- I) Mitsuhiro Hasegawa, Umekazu Kawagishi, Ishjams Ganchigbat, Takumi Nakanishi (2004.5) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia - Common Spaces in Apartment Complexes -. Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.3 no.1, 133-140
 II) Umekazu Kawagishi, Susumu Ishii, Yoshimichi Tsuboi, Noboru Yuasa, Kazuo Usugi, Ishjams Ganchigbat, Badrakh Batbold, Mitsuhiro Hasegawa (2005.5) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia Part 2 - Residential and Living Environments in Apartment Complexes -. Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.4 no.1, 151-159
 III) Umekazu Kawagishi, Susumu Ishii, Yoshimichi Tsuboi, Noboru Yuasa, Kazuo Usugi, Ishjams Ganchigbat, Badrakh Batbold, Koki Kitano, Hirofumi Sugimoto (2005.11) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia Part 3 - Perceptions of Apartment Residents -. Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.4 no.2, 415-422
 IV) Hirofumi Sugimoto, Umekazu Kawagishi, Koki Kitano, Ishjams Ganchigbat, Naoyuki Hirota (2007.11) Living Environment of Nomads Residing on the Outskirts of Ulaanbaatar, Mongolia -Dispositional Characteristics from the Perspective of a Comparison of Nomads and People Living in Ger Fixed Residences in the City-. Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.6 no.2, 283-290

〈参考文献〉

- 1) MONGOLIAN STATISTICAL YEARBOOK 2006, National Statistical Office of Mongolia 2007 年
 2) 政府開発援助 ODA 国別データブック 2006, 外務省国際協力局
 3) 司馬遼太郎：「草原の記」新潮文庫 1992 年 6 月
 4) 小長谷有紀：「モンゴル草原の生活世界」朝日新聞社 1996 年 4 月
 5) 島崎美代子他：「モンゴルの家族とコミュニティ開発」日本経済評論社 1999 年 7 月
 6) 小長谷有紀編著：「アジア読本モンゴル」河出書房新社 2002 年 5 月
 7) 小長谷有紀：「モンゴルの二十世紀 社会主義を生きた人々の証言」中公叢書 2004 年 8 月